

氏名(本籍) すえ末 たけ武 とみ富 こ子

学位の種類 医 学 博 士

学位記番号 医 第 8 6 7 号

学位授与年月日 昭 和 4 9 年 2 月 2 0 日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

最終学歴 昭 和 1 9 年 9 月 2 6 日  
帝国女子医学薬学専門学校医学科卒業

学位論文題目 肺サルコイドーシスの臨床的観察  
— 小児例と成人例との比較 —

(主 査)

論文審査委員 教授 新 津 泰 孝 教授 荒 川 雅 男

教授 滝 島 任

## 論文内容要旨

サルコイドーシスの小児例は内外を通じて報告が少なく、小児例と成人例とを比較した観察報告はない。私は抗酸菌病研究所小児科で観察した小中学生（小児例）の肺サルコイドーシス62名、15才以上（成人例）のサルコイドーシス50名（肺サルコイドーシス48、眼、皮膚サルコイドーシス2）計112名について臨床的観察を行ない、小児例と成人例とについて比較した。

最低年齢は8才、最高年齢は64才で、10～14才が最も多く、ついで15～19才、20～29才であった。性別では8～9才は女、10～14才は男が多く、成人例では女がやや多かった。発見の動機は小児例全例が胸部X線集検で発見され自覚症状はない。成人例では36名がX線検査で発見され、6名は発熱、咳、疲労感などの症状、7名は眼の症状、1名は皮膚の病変があって受診してサルコイドーシスと診断されている。成人の眼サルコイドーシス1名は胸部X線上正常であった。

胸部X線写真所見は、小児例は62名中両側肺門リンパ腺腫大（BHL）のみ87.1%、BHL+肺野病変12.9%で、成人例49名中BHLのみ87.8%、BHL+肺野病変10.4%、肺野のみ1.8%であった。

診断の根拠は臨床所見のみから小児例43.5%、成人例40.0%で、生検またはKveim反応陽性と臨床所見から小児例56.5%、成人例60.0%であった。生検陽性は小児例31名、成人例29名で、部位別の陽性率は右前斜角リンパ腺では小児例27名中81.5%、成人例27名中88.9%でほぼ同率、小児例の表在リンパ腺では6名中66.7%であった。結膜濾胞の陽性率は小児例は22名中54.5%で、成人例の9名中22.2%より高かった。Kveim反応陽性率は小児例は13名中46.1%で、成人例の17名中29.4%より高かったが、生検陽性例については小児例、成人例とも40%台で差はなかった。

胸廓外器官の顕在性病変については、表在リンパ腺触知は小児例は37.0%で、成人例の6.0%より高率であった。結膜濾胞を除く眼病変は小児例では62名中3.2%と少ないのに対して、成人例では肺サルコイドーシス発見後眼科で検査をうけ眼病変が発見された例は42名中26.2%であって、小児例より著しく高率であった。皮膚病変は成人例に1名みられた。

結核接触歴は小児例6.5%、成人例16.0%、BCG接種歴は小児例71.0%、成人例66.0%であって、胃液中結核菌培養陽性例はなかった。ツ皮内反応が陽性でない例は初診時小児例54.8%、成人例44.0%で、小児例では初診時陽性で3カ月以内に陽性でなくなった17名を加えると82.3%が陽性でなかった。陽性例のツ反応は小児例、成人例とも約70%は弱陽性であった。以上からサルコイドーシスでは結核菌感染と関係がないこと、およびツ反応が抑圧されていることを明らかにした。

赤沈1時間値25mm以上の例は小児例になく、成人例で12.0%で、サルコイドーシスでは著

しい促進例はないことを示した。白血球数，リンパ球数はその平均値は小児例，成人例ともに正常値より低く，サルコイドーシスでは減少していることを示した。好酸球増多は小児例では24.3%で，成人例の6.7%に比べ高率であった。尿中蛋白陽性は小児例3名，成人例2名にみられ，成人例1名は腎炎によるもので，他の4名は経過につれ陰性となった。血清総蛋白と $\gamma$ グロブリンは小児例，成人例ともに正常値に比べてその平均値は高く，サルコイドーシスでは増加している傾向を示した。血清尿酸値が正常の上限以上は小児例38.8%，成人例男18.8%，女23.8%，1日尿中尿酸値1.0 $\mu$ 以上は小児例4.8%，成人例22.7%にみられた。血清Ca 11.5 $\text{mg}/\text{dl}$ 以上は小児例51名中1名，成人例41名中1名のみであり，1日尿中Ca 0.3 $\mu$ 以上は小児例19名中1名，成人例10名中3名であった。即ち血清，1日尿中Ca量増加例は殆どなかった。

肺機能検査成績では肺活量80%以下は小児例にのみ8.0%にみられ，全肺容量80%以下は小児例18%，成人例2.7%，残気率35%以上，および15%以下は小児例，成人例ともに4~8%で，多くなかった。DLCO70%以下の低下は小児例13.2%，成人例12.2%で，低下例小児例5名，成人例4名の9名中8名は生検またはKveim反応陽性で，全例BHLのみの所見であった。小児例では眼病変はなく，成人例4名では全例に眼病変があった。

25才，15才に発見され，BHLのみの所見で，ほぼ同時に発病した姉妹例について報告した。

初診から1年後のX線所見の経過をみると，陰影消退は小児例48名中92.3%，成人例28名中67.9%で，ステロイドなしの群ではそれぞれ45名中93.3%，19名中68.4%で，小児例は成人例に比べ，予後がよく治癒の傾向が強いことを明らかにした。

## 結 論

肺サルコイドーシス小児例62名，成人例48名，眼，皮膚サルコイドーシス成人例2名計112名のサルコイドーシスについて小児例と成人例を比較し，次の成績を得た。

小児例と成人例とではほぼ同様の主な成績は，X線写真上BHLのみの所見者が87%であったこと，右前斜角リンパ腺生検陽性率，ツ反応が約半数に陽性でなかったこと，結核菌感染と無関係なこと，白血球数，リンパ球数減少の傾向，血清総蛋白， $\gamma$ グロブリン増加の傾向，であった。

小児例と成人例とで異なった主な成績は，8~9才は女が，10~14才は男が多く，成人例ではやや女が多いこと，小児例は全員集検発見で無症状に対し，成人例では眼症状その他の自覚症受診例14名があったこと，肺サルコイドーシス発見後眼病変発見例は成人例では26%で小児例の3.2%より遥かに多かったこと，結膜濾胞生検陽性率は小児例では55%で成人例の22%より高かったこと，好酸球増多が小児例に多いこと，BHLのみの所見で肺拡散能低下9名中成人例全員に眼病変があったこと，1年後の経過で小児例は90%以上陰影消退し，治癒の傾向が強いことである。

25才，15才の姉妹にはほぼ同じ時期に発生したBHLのみの所見の肺サルコイドーシスを報告した。

## 審 査 結 果 の 要 旨

サルコイドーシスは小児例の報告は内外を通じて少なく、小児例と成人例とを比較した観察報告はない。著者は抗研小児科で観察した小中学生の小児肺サルコイドーシス62名、15才以上の成人サルコイドーシス50名を対象として、小児例と成人例とを比較している。

年齢は8～64才で、8～9才は女が著く多く、10～14才は男が2倍、成人例では女がやや多かった。発見の動機は、小児例は全員がX線集団検査であるのに対し、成人例では36名が集検で発見され、14名は症状があって、うち7名は眼症状、1名は皮膚症変があって、受診して発見されている。

胸部X線所見は小児例ではBHLのみ87.1%、BHL+肺野病変12.9%で、成人例では異常のあった49名中BHLのみ87.8%、BHL+肺野病変10.4%、肺野のみ1.8%であった。診断の根拠は臨床所見のみから小児例43.5%、成人例40.0%であり、生検またはKveim反応陽性を加えて診断した例は小児例56.5%、成人例60.0%であった。生検陽性は小児例31名、成人例29名で右前斜角リンパ腺陽性率は小児例、成人例ともに80%台であった。結膜濾胞では小児例は54.5%で、成人例の22.2%より遙かに高く、小児は診断的価値が大きい。Kveim反応陽性率は小児例は13名中46.1%で、成人例17名中29.4%より高率であったが、生検場性例だけを見ると、小児例、成人例ともに40%台で、大差はなかった。

眼病変（結膜濾胞生検のみ陽性を除く）は小児例では3.2%に対し、成人例では肺サルコイドーシス発見後眼科で眼病変が発見された例が26.2%あり、成人では眼病変は小児より併発しやすい。

ツベルクリン反応が陽性でない例は初診時小児例、成人例とも約半数で、小児例では初診から3カ月以内に陽性でなくなった例を加えると、82.3%が陽性でなかった。白血球数、リンパ球数は小児例、成人例ともに平均値は正常値より低く、サルコイドーシスでは減少の傾向があることを示した。好酸球増多は小児例に多くみられた。血清総蛋白、 $\gamma$ グロブリンは小児例、成人例ともに平均値は正常値より高く、サルコイドーシスでは増加している傾向を示した。血清Ca、一日尿中Caの異常高値は小児例、成人例ともほとんどみられなかった。肺機能検査で拡散能の低下例( $DL_{CO} < 70\%$ )は小児例5名、成人例4名にみられ、いずれも胸部X線所見はBHLのみの所見で、成人例のみ全例に眼病変が認められていた。

ほぼ同じころ発生した25才と19才とのBHLのみの肺サルコイドーシスの姉妹を報告した。

1年後の陰影消退は、小児例53名中92.3%、成人例28名中67.9%であって、小児の肺サルコイドーシスは成人にくらべて、予後がよく、自然治癒の傾向が強いことを明らかにした。

以上本論文においては肺サルコイドーシスについて、小児例と成人例とを臨床的に比較観察し、異同を明かにし、独創的な知見を得ている。従って学位を授与するに値する。